会員便り

イラン印象記

富山県農村医学研究会
会長　豊　田　文　一

一葦帯水という言葉があるが、アジアもここまでくると、ヨーロッパと接点的条件が濃く、その雰囲気が身にせまるようである。イランといっても昔はペルシャ帝国であり、文明の発祥地として、かつて中学時代に教わった東洋史のきわだったページであったことを覚えている。しかし中近東戦争に端を発した石油危機になって始めてアラブ諸国に対する関心、ことに輸入量の40%を依存しているイランの動向は、わが国の経済に重大な影響をもたらし、われわれの生活に直結する問題として看過できなくなってきている。

ただそれまでかすかなイメージとして、私もそうだが、大部分の人達は、恐らく砂漠のなかの開発途上国位にしか考えていなかったろう。事実、今回テヘランで開催される第2回アジア農業農村医学会議に当り、渡航前いくばくかの予備知識をえようと旅行社、出版社を通じて案内書を手に入れんとしたが、適当なものが殆んどなく、幸に学内の教官の方々から、あらゆる分野についてご教示をいただき、それによって概括的な知識をえ出発したわけである。

東京より空路18時間、テヘラン空港に降り立ったのは4月19日夜半である。上空からみたテヘランは闇のなかにこうこうとしてネオンが輝き不夜城のような感があり、流石石油王国で、電気の節約なんか夢にも思っていないような気がした。

私の今回の渡航の目的は医学会議の出席はもとより、テヘラン大学訪問、イランの医療事情調査、それに私どもがかねて研究を続けている土壌、穀類、野菜などの重金属含有量の分析のための試料採取であり、後者に対しては、イランを含めインド、タイ、フイリッピンでもその目的を達してきた。

イランは御承知の通り、ペルシャ大帝国として、その版図はアラブの大半、エジプト、ギリシャ、さらに北は中央アジア、東はアフガニスタン、パキスタン、それにインドの西部まで及び世界文明の開拓の一つの拠点となっていたわけであるが、現在はその国土を縮められている。しかし国民は世界文明の開拓者としての誇りをもっているようであり、このことは小学校の教科書の巻頭に「イランは世界文明を開拓した誇り高き民族である」とかかげてあることからも、この事実を物語っているといえる。

現在のイランは立憲君主制をひいている。また世界最古の王制をもった国であり、2500年前キュロス大王が創始したアケメネス王朝に始まる。これはペルシャ帝国であり、広大な領域をもち近隣に勢力を延ばしていたが、永い歴史のなかで幾多の盛衰を繰り返していた。現パーレビー国王はパーレビー王朝の二代目で、1925年に始まるわけである。それ以前のカジヤール王朝（1794—1925）は長期にわたり権力の座にあったが、その末期石油利権を中心とした汚職が政府高官の間にひろがり政治が乱れ、諸外国の抗争の場となり、国民の信が失われ、国の存亡の危機が迫った頃、レザー、シャー、パーレビーが1921年コサッ

ク騎兵の精鋭数千をひきい、テヘランを占領、カジャール王朝を覆えした。レザー、パーレビーは軍総司令官、陸軍大臣、首相へと進み、1925年、国民会議により国王に推戴され、権威ある中央政府が樹立された。第２次大戦に際し中立を宣言しているが、このナショナリズムの強烈な国王はヒットラーに心酔し、その施策にならって政治の大綱を立てようとしたため、戦略的に石油の補給ルートを確保する目的で、北部はソ連に、南部は英国に占領され、全土は外国の支配に入ったため、その責任をとり退位し、当時22才の若き皇太子モハメット、レザー、パーレビーが第２代の国王に就任した。現国王は白き革命とよばれる農地開放、天然資源（石油、水、森林、牧草地など）の国有化を断行し、近代国家への道を推進している。

政治体系は一応主権在民の立憲君主制であるが、主権はアラーの神の恵みによって、国民より国王に托されたものであるという憲法の規定に従って統治されている。すなわちイスラムの教え、コーランの教義は国の総てを支配しているといってよい。政教一致の体系といえる。このことからいえば君主独裁とも思える。しかし世界の独立国は 158を数えられているが、その85%は独裁的の色彩が濃いが、独裁といえる。かりに日本の近隣諸国をみてもすべてそうである。イランでこのことは直接膚にしみたことだが、開発途上国は、この方向で進まねば近代国家に追いつけないような気がした。

（砂漠地帯の遊牧民）

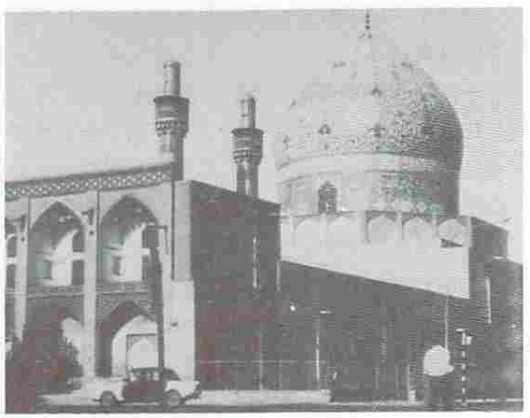
さてイランの面積は 164.5万km²、日本の4.5倍になる。国土の⅓は山岳、⅓は砂漠、⅓は平坦地、この平坦地も標高1,000～2,000ｍの高原である。ただし平坦地でも可耕面積は10%に過ぎない。この実態をみ、私はイランの地に足をつけての第一印象は「水との斗い」であることを痛感した。水に恵まれたわが国では水との斗いといえば洪水対策であるが、ここでは如何にして水を貯え、国民の生活をうるほすか、また産業に結びつけるかにあると思う。

人口は文献によりまちまちで、10年前のものには 1,800万、最近のものでは 2,800万～3,000万と記載されてある。全く唖然とせざるをえない。1,000万人の相違は常識では考えられないことである。これは国勢調査が未だ行われていないといえばそれまでだが、これをみてもこの国の実情がうかがえる。話はそれるが帰途インドに立ち寄ったが、ある知識人にその人口を尋ねたところ７億か８億位でしょうとのこと、その答もイランと軋を一にする。また西アジア最大の都市テヘランは第二次大戦前70万といわれていた。10年前 165万、最近では 300万あるいは 350万とも称せられ、これとても確実な数を誰も答えてくれない。

テヘラン市街とチャドルを着た女たち

国勢調査を行う余裕がないのか、その調査技術、処理方法が国民の手に負えないのかわからないが、これも開発途上国の一つの姿であろう。何分にも国民の８%は放牧の民である。砂漠に草を求めて明日の行えも定まらない人々の把握の不可能に近いことも一つの原因に

数えられよう。都市人口(人口5,000以上)は20%、農村のそれは80%で、このことも近代工業の発達の大きな隘路であり、その遅れを具現したものでもある。ただイランは荒漠たる原野のように思われるが、人の住む所、緑におおわれている。往古のシルクロードの重要な往還であり、ラクダを連らねたキャラバンがオアシスを求めて彷徨したであろうことに想をよせるとき、恐らく人の住む所、オアシスに源を発しているのではなかろうか。テヘラン市街は緑濃き街である。樹木はプラタナス、松が主である。樹木であるが、これはすべて国有である。個人住宅の庭の樹々も国有で径40cm以上のものは許可なしに伐採できない。これだけ規制して始めて緑が保たれているのであろう。年間の降水量はテヘランでは平均50mm³を越えることがない。6〜10月は10mm³以下、9月は0に近い。街路樹は主としてプラタナスで、その根元に側溝が作られ、1日数回2時間ずつ流水される。この水源はダムであり、ここから放流される。この緑は数千年にわたって緑を求めて生き続け、いいかえればこの色彩は心の故郷でもあったろう。このこともイスラムのシンボルカラーは緑であり、国旗も横三条の上は緑となり、中は白、下は赤となっており、またモスク(寺院)のドームもあざやかな緑を浮び出しているものが多い。



モスク

テマバンド山 (6,029m)

イランの北部にエルブールス山脈がある。その主峰デマバンドは 6,029mで、連らなる山脈は3,000〜4,000m級が肩をならべ、四時白雪をいただいている。誰でも考えるだろうが、雪は水であり、この水の利用が今後の開発の焦点と思われるが、今までは流し放しで、砂漠へ吸いこませるのみであった。私は一日カスピ海沿岸にでるとき、この山脈を横断したが、山中の谷は水量豊富で、これをダムでせき止めれば、多目的ダムとして大いに活用できるだろうことを痛感した。もちろんイラン政府もこの水利用を考え、数ヶ所にダム建設を行ったが、未しの憾がある。私も途中一つのダムを見学したが、湛水量は黒四ダム位のものと思われた。この渓谷を走りながら素人の私でもまだまだ数ヶ所の建設が可能のように思われた。これをみるにつけても日本の優秀な土木建設技術をもってすれば、荒漠たる砂漠も緑地化して、急激な人口増に対する食糧問題の悩みも解決されるのでなかろうか。

私がテヘラン南方 420kmの古都イスファハンを訪れた時である。市内見学の際サヤンデールード河畔に立った。かつてはシルクロードの要衝であり、キャラバンの憩の地である。ここにシオセポル(三十三橋)という橋がある。17世紀初頭に建設されたもので、橋桁に33のアーチがあり、その下に橋脚が連らなっている。いわば2階だての構造で、そのアーチが部屋に仕切られ、休憩室、娯楽室、また宿泊の部屋にもなっている。河巾は約 300m、

シオセボル（33橋）

水は豊かに流れている。ここでガイドから奇妙な言葉を聞いた。「この河は70km上流から始まり、30km下流へ行けば消えてしまう。すなわち砂漠の底に吸いこまれる」日本人の感覚からすれば下流に行けば行く程水量が増大する筈である。この話を聞いて私のいだいていた一つの素朴な疑問が解けた。というのはキャラバンが命の縄とも頼る砂漠のなかのオアシス、どうしてこれができるだろうかである。これは砂漠に消えた河川が地下数 100mの伏流水となり、地勢の関係で、忽然として地上に浮び出た所がオアシスであろうとの思を走らせた。

イランは石油の埋蔵量は 220億バーレル（ 350億kℓ）といわれる。それにも拘らず数年前まで発電量の80%は水力、20%は火力であったそうだが、現在は各50%ずつとのことである。しかし電燈のある所は主要都市だけで、その他はランプ、またそれもない所もあり、発電量の正確な数字を聞きもらしたが微々たるものらしい。従って第2次、第3次産業は微々たるもので、ほとんどは輸入に依存し、国の近代化には水とエネルギーの開発を要し、パーレビー国王はこれを推進していると聞いている。

この広大な砂漠のなかにも、細々ながら住民はいる。人がいる以上水は不可欠である。私どもは、たまたまへき地医療の実態の調査に砂漠のなかの部落を訪ねた。やはり水はあり、周辺に農耕地がある。住民は砂漠をとりまく山麓に限られているのも特徴的である。これも矢張り伏流水のあることを知ったにちがいない。山麓傾斜地の上方に井戸を掘る。深さは50～100m、最も深いものは 240mに及ぶものもある。もちろん手掘りで、周囲の軟弱な所はレンガで固められる。この深さは夏期（乾季）の地下水位より深くする。その底から放射状に水平坑を上方にむけて掘り水を集めるようにする。さらに村落からこの主井戸に向って1/100位のゆるい傾斜で溝を掘り、山麓にかかるとトンネルとし主井戸の底に連絡させる。これは地下水を自然流出させる方法であり、この主井戸は部落の大さによって数10にも達することがあり、上空よりみれば蟻地獄のように見えるとのことである。この工法はカナートといい生活の知恵とはいいながら細々とした灌漑法で、イラン独特のものであるらしい。国外ではエジプトの寺院に見られ、紀元前5世紀にペルシャがエジプトを征服したとき、その工法を持ち帰ったものと伝えられている。これは住民の生命のもとであり、13世紀から始まったモンゴルと軍の相次ぐ侵略は、先ずこのカナートの破壊であり、このため全土が壊滅に瀕する事態となった。いくら修復してもまた侵入して破壊を繰り返したのである。ただこの時期でも「ペンは剣よりも強し」といわれるようにペルシャ文化は死せず、征服者すら感化し、サーディやハーフィズなど数多くの詩聖を生み、文化の伝統は維持されている。しかしモンゴルのチムール王朝の衰退後、外敵の侵略も少なくなり、16世紀初期、純粋なペルシャ王朝であるサファビー王朝が抬頭し、イスラムを国教と定め、国家統一をしたわけである。これよりペルシヤ王国の黄金期をむかえたわけである。

なおこのカナートであるが、原始的灌漑法——→原始的農業から農業の近代化への脱皮、砂漠の開発はあくまで水であり、ダム建設後の灌漑についてわが国でも研究を続けており、とくに用水壁の合成化学材料も日本のある企

業で開発されており、近い将来実用化すると聞いている。また砂漠地帯に適する食糧性植物についても日本産の種子による試作が行われ、わが国の誇るべき科学技術をこの不毛の地に発揮できるのは、そう遠くない時期のように思える。

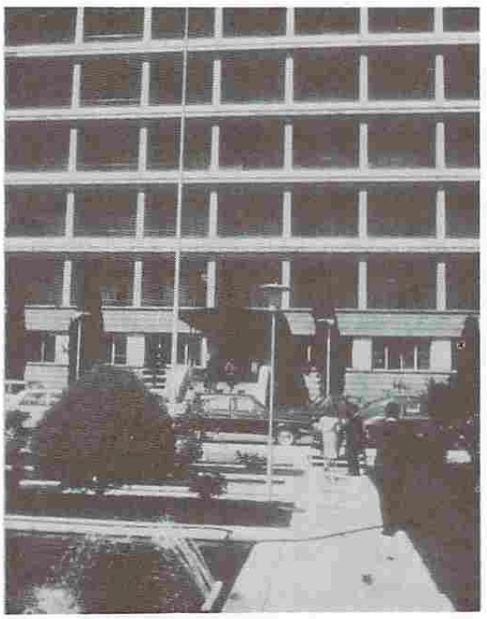
さてイランの政治的動向であるが、中近東の戦乱にアラブの一国として、イスラエルに敵対感情を持っているが、直接の武力援助はしていない。外交的には共同戦線を張るといっているものの静観の状態にある。路線としてはアメリカ寄りであることは否定できない。ソ連に対して余りいい感情をもっていないらしい。というのはカスピ海沿岸の中央アジアの穀倉地帯およびバグーの油田地帯は帝政ロシヤ時代武力侵略で奪われた歴史があり、未だその記憶が国民の頭から離れないためでもあろう。ソ連も一時はイランの共産化に力を注いだといわれているが、不成功に終ったと聞いている。ただし日本に対する認識はほとんどない。一般の人々は日露戦争でロシヤを破ったことと、第二次大戦でシンガポールを占領したという程度で、ことにロシヤに勝ったことは未だに頭に残っているらしい。しかしイラン自身軍備の拡張に力を注ぎ、兵隊の多いのに驚く。諸官庁はもとより街頭で軍隊による警備が厳重で、主要道路も兵士や警官が警戒している。だから治安は極めて良好で、私どもも単独で可なり遠距離へも行動でき、現実の姿が見聞できたことは幸であった。

イランの年間予算は 800億ドル（２兆44億円)、日本の$1/10$、人口は$1/3$であるから比率からすれば遙かに少ない。生産は石油だけだから、国家予算の大部分はここから生れる。ただしふんだんに入る外貨、オイルダラーは外国に貸しつける。丁度イスファハンにいたとき、アフガニスタンの大統領と同じホテルであった。用件をもれ聞くとイランへ金を借りにきたとのことである。しかし現在盛んに輸出している石油も1990年代に枯渇するといわれている。その時期になってどうなるか。パーレビー国王はその時期までに先進国に追いつくといっていることよりすれば、結局それまでに将来国が立ちゆく外貨を保有し、その利子で国の財政がまかなえるようにと考えているらしい。だから石油という巨大な武器の価格操作は自由である。外貨準備のため、いつ何時値上げを迫るかわからない。もしＩＲＡがその立場にあり、国の開発に資金が必要となれば、このような考えが起りうる可能性がある。天然資源の乏しいわが国では常に被圧迫という立場にあり、国際協調、協力でこれを打開してゆくより他方法はないような気がする。

では国民の生活はどうか。会議中は政府関係者や医師との交流で大した感慨もなかったが、実際に農村地方へ出向き、住民の生活をみて貧富の差の著しいのに驚いた。カスピ海沿岸の米作地帯は比較的生活は豊からしかったが、その他は家屋にしても土で固めた土まんじゅうのような住居に、僅かばかりの窓をうがち、電燈はおろかランプさえもない。また遊牧民はロバやラクダの背に家財やテントをおわせ、牧草を追いながら羊の群を移動させている。夜は光を失っている。人間の生活は日の出から日没までで、その他は闇ということで、動物と変りない。しかしこの闇のなかということは人口の増加に連ながる。人口の増加率は世界で最も多い国に属する。ＷＨＯの1972年の統計によると 1,000人対出生36.7、死亡 5.0、人口の自然増は 3.2%、最高のヨルダン 4.2%、クェート 4.0%に次ぐ高率である。日本は 1.3%で約３倍に近い。これに関連する重大な問題は食糧である。イランの一般の人々の常食にしているのは米であり、その他バリバリと称する小麦で作った半焼きの厚いせんべい様のものである。米はカスピ海沿岸の米作地帯で大体国民の需要をまかなっているが、麦は不足で外国に依存している。動物性蛋白質は主として羊肉であり、魚類は極めて高価で庶民の口に入りにくい。

この羊肉とても、あれだけ多くの羊を放牧しているもののここ数年前までは１人１年平均1.8kgであったそうだが､現在５kgになっている。そのためオーストラリヤより輸入していると聞いた。ちなみに日本人ではどうか。動物性蛋白質として肉類は１人１年平均15kg、魚類30kgという数字があがっており、栄養上で大きな隔差がある。ただしイラン人はヨーグルトを嗜好しているのでカロリーを補っているようである。一般国民の生活は貧しく、国として一般常用消費物資には価格補給金を計上して生活安定に資している。それは15品目とのことで、米、麦、塩、砂糖、肉類、衣料などがあげられている。人口の増加と食糧、飢餓、これは現在も第３世界の国々にみられるが、全人類のさしせまった重要課題であり、インドではぢかにその実態に接して痛感した。

次に今回のイラン出張の一つの目的はテヘラン大学訪問である。前から大学長宛に視察の要請をしてあったので、都合がよかった。



テヘラン大学本部

ただ学長が海外に出ていたので主席副学長のカズミ博士が応待してくれた。この人は医学出身の人で、私にとっては好都合であった。

テヘラン大学カズミ主席副学長と共に

イランの学校制度は小学校５年、ガイダンススクール３年、高校４年、大学４年、ただし医歯は６年で年限では日本と変りない。内容的にはフランスにならって教育しているということである。この国は文盲率80％で小学校を義務教育として教育を最重点施策としているが、正確な人口の実態もつかめていないし幾百万という遊牧民をもっているので、その成果を完全に期待することは困難のような気がした。日本では江戸時代でも寺小屋方式といいながら男子65％、女子40％は読み書きできたそうだから、この国の教育状態の概要が知られよう。ただ一部の上層階級は本国の教育にあきたらず、主としてフランス、スイスに留学して教育を受け、私の接した人達は３ヵ国語位マスターし、こちらがはずかしい思いをしたことも度々あった。実はテヘランから約 1,000キロ離れているシラーズから一人の医師が学会場に私を訪ねてきた。その用件は患者の診察であり、日本から耳鼻科の専門医が学会に出席していることを聞き、患者の診察を依頼してきた。君はフランス語で話できるかと問うたが、これにはノンと答えるしかなかった。病気のことであり、ドイツ語なら少しは話せるといった所、その医師はドイツ語でも英語でもいいからといい、実にはずかしい思いをしたが、日本人の会話力の弱いのが学会にでての共通の悩みであった。用件は口腔の中の腫瘍で悪性か良性か診断してくれというのであったが、可なり大きいもので

あったが、歯根嚢胞という疾患で良性だが手術を要するだろうと伝えたのである。こんな簡単なものでも診断がつかないことを思い、イランの医学教育の姿を思うことができた。実際本学の医学部の諸君でも診断がつくようなもので、日本の医学の水準も併せ考えるよすがになった。なおこの医師はフランスの医科大学を卒業したといっていた。話は一つの挿話にそれたが、テヘラン大学は23学部あり、学生数は２万人。大学本部は学部キャンパスと離れて独立してある。これは市内の中央に位し、約３km離れて各学部が統合されてある。ここは国立で国内で最も整備され全国から志望者が集中し、大学院もマスターコース、ドクターコースを兼ね備え、院生16,000名とのことである。この大学の総合大学としての創立の日は浅く1928年であるが、この中核となったのは医学部で、その歴史は古く1889年で、これを中心として各学部が併合されてきたものである。学部のキンパスに出向くことになったが、その案内はこの３月本学に来訪されたネーザム・マーフイ博士で好都合であった。この人はイラン核医学会の会長である。色々と話し合ったが、大学の授業料は奇しくも日本と同額の 120ドル（３万６千円)、ただし卒業後直ちに兵役につく場合（これをミリタリーサービスといっている）授業料は免除される。イランは男女共に徴兵の義務が２ヵ年間あり、この義務がすまないと自由に仕事を選べない。なお授業料免除は全学生の98％で、２％だけは授業料を払っているとのことである。全土をみて、テヘランを始め都市といわれる所は、文化的色彩があるが、一度この都市を離れると全く旧ペルシャ時代そのもののように、あらゆる生活環境が前世紀的のものである。80％の国民がこの農山村砂漠地帯に生活を営んでいることになる。この開発の担い手は義務を負わされた大学卒業生である。イランではこれらの青年はエリート中のエリートで、何分にも全国から集中、入学試験も定員 4,000名に対し６万人、医学部の如きは 300名に対し１万名という激しい競争率である。農村地帯開発の指導者として、工学部の卒業生は土木建設、教育学部のそれは教員として、医歯学部卒業生はへき地医療、健康管理に挺身、それぞれの専門に従って国土開発に向けられるような方途がとられている。

さて学部視察のためキャンパスに入ろうとした所、驚いたことには校門には10数名の兵士が自動小銃をもって警備している。正面にはデンとパーレビー国王の銅像がそびえている。日本では考えられない風景である。また左側には大きなモスクのドームが樹間に現われている。この銅像とモスクが、この大学の教育方針の象徴でもあるかの如く感ぜられる。校舎はせいぜい５階止りで高層のものはない。各学部は年次的に逐次増設されたもので、古い校舎はすでに黒ずんでいる。各学部を詳細に視察する時間的余裕もなかったので、医学部と健康管理学部を廻るに止った。丁度正午で休みの時間であったが、学生は何のくったくもなく散策していた。医学部をみたが附属病院をもたない。学生の実習はすべて市の教育関連病院で行われている。ただここは健康管理学部には特に力を入れているようで、教室や廊下などに、イラン全域にわたる医療の状態、住民の生活環境、住民の健康管理の指標などの展示がしてあり、学生とも話をしてみたが、卒業後住民福祉に挺身する気魄が満ちていることがうかがわれた。ただしここの卒業生は医師としてではなく、日本における保健婦の仕事を系統的、予防衛生的に行うことが多いわけである。私はこの大学を訪問して特に図書館の参観を希望、館長は休憩中であったが、その案内でみてまわった。もちろん図書館は大学の中心であるべきは論を俟たないが、この大学も図書館の整備に重点をおいている。蔵書は 100万冊（金沢大学は70万冊）古今東西のもののしゅう集に力を注いでおり、館長は私を古書の部屋に導いてくれたが、専

門外で私にはわからないし、ペルシャ文字で書かれていたが、1,200年前の図書が何らの破損もなく並べられているのに驚いた。また医学書にしても 300年前の解剖の書があり、解剖図は可なり正確なもので、本学医学部蔵の解体新書、これは 200年前のものであるが、見劣りはしなかった。ただ大学の教育はイスラムの教義により行われ、そこには一定の制約があり、日本のように何らの束縛もなく教育研究を行える国と比較して、教育理念の根本的相違を痛感した。ことに私ども自然科学の分野にあるものとして、学問の進展にある制約が加わるのではないかとの疑念も頭のなかをかすめた。かつてコペルニクスの地動説が宗教的圧迫により、永い間葬りさられた如くに。

最後に学会の模様についてふれてみたい。この学会での私どもの講演は「アジア地域の米粒中の重金属の含有量、とくにカドミウムについて」であるが、私どもが10数年来イタイイタイ病の研究を続け、かつ私自身この診療の経験ももっているわけで、その成因についてのカドミウム主因説について多くの疑問点も持っており、裁判で結着がついたと称しているが、科学的には未解決の点も多く、真実の究明のため研究を続けているわけである。

学会場前にて

という一の理由は日本各地において、土壌、米のカドミウム含有量が、患者の集中地帯の富山県婦中町より上まわっている所も少なくなく、しかもイタイイタイ病は発生していない。また動物実験でも証明されない。それで米を主食とするアジア地域の米の中のカドミウム含有量はどうであるかの分析結果を報告し、併せてイタイイタイ病様疾患の有無についての各国の意見を求めるためのものであった。さてイランでは国際的の医学会議は始めてであり、会の運営が不慣れで、私どもの講演の日程も何日目かわからず、会場の受付で渡されたプログラムをみて始めて知った次第である。しかも農薬中毒の群で、その司会者として私の名がのっている。多少は農薬中毒についての知識はある積りだが、私の専門外であり、講演の内容も今渡された抄録で大体の概念がつかめたものの、司会する以上勉強もせねばならず、挨拶の言葉の用意も必要であり、一夜漬けの言葉で何とか切り抜けたものの冷汗ものであった。

会場は国会下院の議事堂が当てられていた。これはカジヤール王朝が王宮として使用されていたもので、日本のそれのように広大ではないが、豪華なシャンデリヤ、敷きつめられたじゅうたん、調度品の華美は日本の国会議事堂の遠く及ばない所である。

アシラーフ王女

この学会の名誉総裁（Patron）はアシラーフ、パーレビー王女である。この方はパーレビ国王と双生児であり、また国の実力者である。というのは国の政策のうち教育、住宅、健康管理、女性の地位向上の部門については国王の指示により、その大方針の設定に大きな役割を演じている。余談になるが新聞紙の報道によると、6月に開催されたメキシコにおける国際婦人年総会場において、同王女はエレガントなフランス語で、婦人の地位向上のため演説し、しかもこの事業に対し100 万ドルの寄附を行い、流石オイルダラーの溢れている国と並いる各国の代表を嘆ぜしめたと報じている。

開会式に当り、王女指導のもとに実施されつつある砂漠地帯のへき地農村の健康管理について堂々40分にわたる大演説があり、その言葉のなかで方法論について医療のシステム化に触れ、本会議で充分な討議をされんことを要望し、かつイランの現状の批判も甘んじて受け、先進国（主として日本）の示唆を得たいと述べられた。この演説とともにイランの農村の健康管理の映画も供覧されたことが印象的であった。会議そのものの内容はアジア地区農村保健の現状報告が多く、これを聞いていると、その住民の生態、またこれについての対策は日本の半世紀前という感じであった。

医療事情の詳細については機会を改めて述べることとしたいが、人口3千万人に対して医師1万名、10万対33名、日本の現在10万対115名という数字からみれば如何に少ないかがわかる。わが国では現在医育機関の増設で、昭和60年までに10万対 150という目途で医師数の増加を進めている。ただ医師の都会への集中は世界各国の傾向であり、イランもご多分にもれず、この傾向が強く、医師の80%は都会に集中している。しかも農村の人口は80%で、この地域の医師の過疎はこの数字でも了解できるだろう。だから医学部卒業生は、義務づけられている Military Service として国の命令により、2ヵ年間農村の保健医療に従事させられる。この計画について、アシラーフ王女が参画し、Behvarz という制度が生れてきたわけである。これは日本の旧軍隊

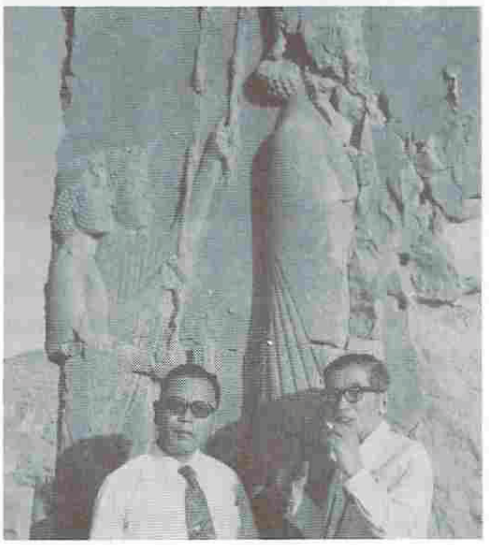
ヘルスサービスの医師

にあった衛生兵と考えればよいが、簡単な医療を行いうるもので、農村の末端ではHealth Housという組織となり、これがいくつか集まって Dispensary（診療所）が設置され、ここには正規の医師が2名位、さらにこれらの中心にHealth Center、District Hospital Regional Hospitalと順次高度の医療に貢献することになる。これはわが厚生省の考えている医療網の整備計画に似ている。

アシラーフ王女の招待にて王宮へ

私どもがテヘラン滞在中の圧巻は、王宮への招待であった。アシラーフ王女が遠来の私どもを玄関まで出迎えられ、豪華なペルシャ様式の宴会場で接待され、また私どもとも心おきなく歓談されたことは思い出に残る一こまであった。

以上でひとまず見聞記を終るが、テヘラン以外では、日本の京都ともいえるイスファハン、奈良に当るシラーズ、また2500年前栄えた宮殿の廃きょペルセポリス、さらにカスピ海沿岸の旅も試み、ことに砂漠のなかの農村へまで足を延ばし、自分の求める地域への見聞をひろめえたことは幸であった。これもイラン自体の治安の良好さを物語っている。



ペルセポリス

最後にイランは「水との斗い」が如何に解決されるかが、この国の命運を決するであろうことを、最も大きな印象として、インドへ向った。なお今回の出張に際し、日本鉱業協会、富山県厚生連、小松製作所よりご援助をえたことに対し感謝の意を表する。